

レポート作成と口頭発表を連携させたクラスにおける学習活動と学習項目の分析

—留学生に対する予備教育を例に—

An Analysis of the Learning Activities and Syllabus in a Japanese Language Class that Connects
Report Writing and Oral Presentations: Example of a Preparatory Educational Program

中井陽子・鈴木孝恵（東京外国語大学）

NAKAI Yoko, SUZUKI Takae (Tokyo University of Foreign Studies)

要 旨

本稿では、学部進学予備教育でのレポート作成と口頭発表を連携させた上級日本語クラスにおける学習活動と学習項目について、学習者がどのように捉えていたかをインタビュー調査でのコメントを基に分析した。それにより、今後の実践に向けた改善策を検討し、レポート作成と口頭発表のための教育実践で教師に求められる姿勢について再考した。

In this study, we examine the learning activities and syllabus in an advanced Japanese language class that connects report writing and oral presentations in a one-year preparatory educational program. Based on the analysis of student interviews about the learning activities, we discuss ideas for improving future practices and the teachers' attitudes needed in this kind of class.

【キーワード】 レポート作成, 口頭発表, 学習活動, 学習項目, 学習プロセス

1. はじめに

日本の大学に進学する留学生のための予備教育では、大学の勉学に必要な日本語力、及び、人文社会・自然科学の専門分野の基礎学力の両面を身に付けさせることが求められる。それゆえ、日本語クラスでは、大学で必要とされるレポート作成や口頭発表等の学習活動のプロセスを一通り体験し、そこでの学習項目を掴む機会を与えることも重要となる。

筆者らも、学部進学予備教育の一環で、上級レベルでのレポート作成と口頭発表を行うXクラスをチームティーチングで担当することになった。だが、Xクラスの学習者はこれまで日本語で専門的なレポートを作成した経験がないため、どのような学習活動をデザインすれば良いか、また、チームティーチングでレポート作成と口頭発表の学習活動をどのように連携させていけば良いか等、戸惑う点が多かった。そこで、筆者らは、他クラスの教員の助言を受けつつ、これまでの互いの教育経験を基に打ち合わせを重ねた。

宮崎（2012）によると、これまでの作文やレポート作成等の文章表現教育に関する研究は文章の語彙分析等のプロダクト（産出物）の分析が中心であったが、近年は原稿を書き上げるプロセス（過程）の研究へと移行してきているという。例えば、村上（2008）は、質疑応答等の口頭発表での学習過程がレポート作成にいかに関与しているかを分析している。また、作文推敲の過程で学習者同士が自律的に学び合う「ピア・レスポンス」を取り入れた教育実践も近年活発になっている（池田2007、大島2009等）。ピア・レスポンスは、教師添削に比べ、内容面の深化、言語面の内化で有効だという報告もある（原田2006）。

そこで、筆者ら担当のXクラスでも、学習プロセスを重視し、レポート作成の進捗状況を口頭報告して質疑応答する機会を十分設けつつ、ピア・レスポンスによる学習者同士の

学び合いも取り入れた実践を行うこととした。但し、予備教育におけるレポート作成経験のないXクラスの学習者であることを考慮し、レポート作成と口頭発表のための基礎的な学習活動、及び、教師からのフィードバックも十分に行うこととした。そして、各学習活動を入念に積み上げていけるように、教員間の連絡を密にして授業に臨むこととした。

本稿では、このレポート作成と口頭発表の実践において、筆者らがどのような学習活動と学習項目を選定して扱ったかについて、学習プロセスの流れの中から整理する。その上で、学習者がそうした学習活動と学習項目をどのように捉えていたかについて、学習者へのインタビュー調査を基に分析する。それにより、今後の実践に向けた改善策を検討し、レポート作成と口頭発表のための教育実践で教師に求められる姿勢について再考する。そして、この実践研究を通じた筆者らの教師としての学びについても内省する。

2. 1年コースと総合日本語の概要

筆者らが所属する東京外国語大学留学生日本語教育センター（Japanese Language Center, 以下 JLC）では、国費学部進学留学生に対する1年間の予備教育（以下、1年コース）が行われている。1年コースにおける「総合日本語」科目の中で筆者らが担当したXクラスの実践を分析する。そこで、まず、「総合日本語」Xクラスの背景を踏まえるため、1年コースとそこでの文章表現、口頭表現の指導、及び、総合日本語の概要を述べる。

JLCの1年コースは3学期制で、春学期（4月～7月、日本語科目1コマ90分、計165コマ程度）、秋学期（9月～12月、計100コマ程度）、冬学期（1月～2月、計45コマ程度）となっている。日本語のほかに理科系と文科系の専門基礎科目の授業も日本語で行われている。近年は50数名ほどの学生が7クラス程度に分かれて在籍し、初級から学習を開始し、冬学期に上級になる。但し、既習で来日し中級や上級から開始する者もいる。

1年コースでは、JLC作成教科書（初級・中級・上級）を基本的に使用する授業のほか、技能別の授業も行われている。近年は、大学での勉学に直接的に必要な初級～上級の日本語力の達成基準が「JLC日本語スタンダード」（2006年初版、2011年最新改訂版）に示され、それに基づいた文章表現、口頭表現、読解、聴解の各技能別教材が開発されている（坂本2007、東京外国語大学留学生日本語教育センターHP 2010）。

特に、文章表現では、言語的側面・構成的側面・内容的側面のうち、初級と中級段階で言語的側面と並行し、構成的側面（序論・本論・結論）に重点を置いた教育実践が行われている（横田・伊集院 2009）。更に、中級段階では、分類・定義・引用・比較等の機能的な表現を用いた説明文、事実と意見を区別し論拠を挙げた意見文を書く等に焦点が置かれ、上級段階では論理的な内容的側面の深化に焦点が置かれている（伊集院 2011）。

口頭表現では、初級段階から3部構成（Opening→Body→Ending）を意識して「まとまりのある話ができる」ことを目標に1分スピーチをさせる教育実践が行われており、特にBodyでのテーマ絞り込みの必要性が示されている（工藤・藤森 2009）。中級段階では、身近なテーマから、社会的・文化的・グローバルなテーマへと発展させた口頭発表を行い、授業中のやり取り、資料読解、レジュメ作成等を通して、総合的にアカデミックな運用力を養成し、上級の技能統合型の科目へ発展させていく教育実践が行われている（工藤 2011）。

こうした教育の流れの中で、1年コースの最終段階である冬学期には、上級の共通教材を使用する授業とは別に、各技能を総合的に用いる「総合日本語」が設けられている。「総

合日本語」の全クラス共通の大目標としては、専門性・時事性の高いテーマについて、文献資料や調査データを集め、論理的に考えてレポートにまとめ、口頭発表できるようになることという大枠が JLC 日本語スタンダードを基に設定されている。この総合日本語は、主に文章表現に焦点が当てられた「総合日本語 A」と、口頭表現に焦点が当てられた「総合日本語 B」に分かれている。総合日本語 A では4頁以内にまとめたレポートを1年コースのクラス全体の「小レポート集」に掲載すること、総合日本語 B ではレジュメを作成して10分程度の口頭発表を最後に行うことが予め決められている。これらの活動を通して、大学進学後の勉学を開始しやすくすることを狙いとしている（伊集院 2011）。

このような1年コースにおける初級から上級への入念な学習の積み上げと、JLC 日本語スタンダードに基づいた教材開発・教育実践・研究、及び、その最終段階で実施される「総合日本語」の枠組みと目標設定の下、筆者らが行ったXクラスの教育実践がある。これを踏まえた上で、Xクラスの実践を分析し、今後のより良い実践に向けた考察を行いたい。

3. Xクラスでの実践概要

2013年1～2月（冬学期6週間、全20コマ）に実施された「総合日本語」のうち、筆者らが担当したXクラスの教育実践を分析する。Xクラスの実践は、主に文章表現を担当する「総合日本語 A」（12コマ）の教員1名、及び、口頭表現を担当する「総合日本語 B」（8コマ）の教員1名によるチームティーチングで行った。元々、総合日本語 A はレポート作成、総合日本語 B は口頭発表をそれぞれ異なった研究テーマで行う独立したクラスであったが、本実践を行った2012年度より同一のテーマでレポート作成と口頭発表を行うという形態が取られた。そのため、筆者らもXクラスという共通の学習者を対象に、総合日本語 A と総合日本語 B を担当する2名の教師の連携によって実践する必要があった。そこで、実践を開始する前に、授業スケジュールを教師間で話し合っって作成した。そして、実際に開始してからも、お互いの学習活動や学習項目を把握し、各自の実践に反映させつつ随時調整できるように、連携を強化しながら進めることにした。具体的には、対面やメールで学習活動やフィードバックの詳細についての引き継ぎを行う、各自の受け持ち授業のほかにもう一方の授業に参加する等である。本実践の授業の流れを表1に示す。

表1 本実践の授業の流れ（「総合日本語」におけるXクラス）

総合日本語 A（文章表現・教師Y担当）	総合日本語 B（口頭表現・教師Z担当）
1月8日（火）2コマ	1月10日（木）1コマ
<ul style="list-style-type: none"> 授業説明（授業目標、学習活動の流れ、課題、評価） 冬休み宿題：記事のレジュメ報告（cf. 大津 2012, 2013） 先輩の小レポート集の分析の方法の説明 研究テーマの口頭報告 本、記事、論文の探し方（図書館ツアー） 	<ul style="list-style-type: none"> 授業説明 研究テーマの口頭報告 文献調査と実態調査の方法 調査計画書の書き方 先輩の発表会 DVD の分析
1月15日（火）2コマ	1月17日（木）1コマ
<ul style="list-style-type: none"> レポート序論と研究動機の口頭報告 先輩の小レポート集の分析 引用の仕方、参考文献リスト、先生へのメールの書き方 	<ul style="list-style-type: none"> 発表の表現1（調査計画の説明の仕方） 調査計画書の口頭報告
1月22日（火）2コマ	1月24日（木）1コマ
<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関する先行研究の口頭報告 序論・研究動機の議論（ピア・レスポンス） レポートのアウトライン作成 	<ul style="list-style-type: none"> アウトラインの口頭報告 文献調査シートの作成 アンケートとインタビューの仕方

1月29日(火) 2コマ	1月31日(木) 1コマ
<ul style="list-style-type: none"> ・レポート下書き作成 ・レポート下書きの討論(ピア・レスポンス) 	<ul style="list-style-type: none"> ・図表の説明の仕方, 調査結果のまとめ方 ・口頭発表の資料作成(PPT, レジюме)
2月5日(火) 2コマ	2月7日(木) 2コマ
<ul style="list-style-type: none"> ・レポート下書き作成 ・結論の口頭報告 ・レポート下書きの討論(ピア・レスポンス) 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の表現2(口頭発表の仕方:話し始め・順序立て・資料提示・説明・意見・話し終わり・質問と答え) ・発音練習(フレージング) ・口頭発表の資料作成(PPT, レジюме)
2月12日(火) 2コマ	2月14日(木) 2コマ
<ul style="list-style-type: none"> ・レポートの下書き作成 ・レポート下書きの議論(ピア・レスポンス) ・口頭発表の発音練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終発表会(一人10分) ・相互評価, フィードバック ・レポート完成版とレジюме清書の提出

学習者は、2012年4月に初級から開始して冬学期に上級になった7名で、南・東南・東アジア(非漢字圏)、中南米、アフリカ出身であった。年齢は19~21歳で、高校卒業直後から、母国で大学2年時に在籍していた者までいた。大学進学後の専門は、薬学、環境工学、機械工学、電子工学、生物学、経済で、学習者らは、それぞれ「アルツハイマー病」「運動不足病」「下水処理」「ロボット手術」「再生可能エネルギー」「財政政策」「補助犬」といった専門性・時事性の高いテーマを選んでレポート作成と口頭発表に取り組んだ。

2章で述べた「総合日本語」の大枠の下、Xクラスでは、特に、専門外の読み手・聞き手も興味を持って分かりやすいレポート作成と口頭発表を行うことに焦点化して、クラスメートや教師とのやり取りを促進させるように試みた。また、Xクラスの学生達が日本語で専門的なレポートを書いた経験がないことを考慮して、自作教材を使用して、レポート作成の基本的作業や口頭発表の仕方などについて説明・練習を行った。

本実践の学習活動は、表2のように、①目標設定の段階、②構想の段階、③レポート作成・口頭発表準備の段階、④やり取りの段階、⑤最終発表の段階という5段階から捉えられる。①と②、③と④の段階は、行きつ戻りつ同時進行で行った。こうした学習プロセスの中で、表2のようなXクラスに合わせた学習活動1~10を主に行い、その中で各学習項目を扱った。まず、Xクラス向けに、レポートや口頭発表とはどのようなもので何に留意すれば良いかを意識化して目標設定が行えるように、前年度までの先輩の小レポート集と発表会DVDについて言語面・構成面・内容面から分析する活動を行った(学習活動1, 2)。次に、他クラスと共に、図書館での本や雑誌、記事の検索方法を習う「図書館ツアー」に参加した(学習活動3)。そして、調査計画書(テーマ、テーマ選定理由、既知情報、調査内容、予想内容、調査方法)を作成し、レポート作成に必要な情報を検討した(学習活動4)。特に、内容を深めるために、テーマに関する問題・定義・現状・歴史・先行研究等についての基本的な調査の必要性を教師側から指摘した。その後、レポート作成を進め、その内容の発表資料を作成した(学習活動5, 6)。レポート作成中は、口頭報告で、研究テーマ、調査計画書、アウトライン、先行研究・序論・結論の進捗状況を伝え、クラスで意見交換を図るとともに、作業の進み具合がお互いに確認できるようにした(学習活動7)。また、教師からのフィードバック(学習活動8)がある程度終了した学習者は、ピア・レスポンス活動を行って、お互いのレポートを読んでフィードバックし合えるようにした(学習活動9)。レポート作成に時間がかかる学習者に配慮し、ピア・レスポンスはクラスで一斉に行うのではなく、あくまでも作業が早く進められている学習者のみを対象として、柔

軟性を持たせた。このような学習プロセスを経て、レポートが整った授業最終日に10分程度の口頭発表を行った（学習活動10）。その際、各学習者の発表をビデオ撮影して自己分析を促すとともに、ピアや教師のほか、修了生の先輩学部留学生ゲスト2名からも多角的なフィードバックを得て、春からの学部進学への目標に繋がるようにした。

表2 本実践の学習活動と学習項目（「総合日本語」におけるXクラス）

学習プロセスの段階	学習活動	学習項目
①目標設定の段階	1. 先輩の小レポート集分析	・求められるレポートの体裁を知る ・より良いレポートとは何か考え、自己修正する
	2. 先輩の発表会DVD分析	・求められる口頭発表の形を知る ・自身の口頭発表を改善する
②構想の段階	3. 図書館ツアー	・本・記事・論文の探し方を知り、必要な文献を探す
	4. 調査計画書、アウトライン作成	・調査計画書を書き、テーマを絞って、内容と構成を考える ・アウトラインを作り、レポートの内容と構成、主張を固める
③レポート作成・口頭発表準備の段階	5. レポート作成	・参考文献を調べ、内容を引用してまとめ、参考文献リストを作る ・レポートにまとめ、完成させる（序論・本論・結論・参考文献等）
	6. 口頭発表の資料作成	・口頭発表の資料を効果的に作成して説明する（図表・PPT・レジュメ）
④やり取りの段階	7. 進捗状況の口頭報告	・研究テーマを選び、内容を絞り、研究と自身の関係を深く考える ・読者に伝えたいこと、研究と社会の関係を考える ・研究テーマに関する先行研究の内容を理解して、報告する ・考察や結論を検討し、序論と研究テーマと結び付ける ・研究の意義・主張・今後の課題は何かを考える
	8. 教師からのフィードバック	・言語面、構成面、内容面のフィードバックを検討して、レポートや発表資料を修正する ・教師とのやり取りの方法を学ぶ
	9. ピア・レスポンス	・他者のレポートを読んで、有益なフィードバックをする ・他者からのフィードバックを基に、自身のレポートが改善する ・人的リソースを活用する
⑤最終発表の段階	10. 最終発表	・10分程度の口頭発表を行う ・自然な発音や話し方で話す ・質疑応答や司会をする ・相互評価・フィードバックをする

評価は、平常点（出席・参加度）50%、及び、課題（授業中の提出物、最終レポート、文献の口頭報告、進捗状況の口頭報告、最終口頭発表・レジュメ）50%であった。レポート作成の基本的作業の説明、発表の表現練習、口頭報告・議論等は、クラス全体で行い、それ以外は、必要に応じて教室に学習者がパソコンを持参して個別作業を行った。また、学習者のレポートやレジュメ等は、基本的に教師にメール送信し、教師が添削し、紙媒体やメールで受け渡しを行った。授業時間外にも、適宜教師による個人指導の時間を設けた。

4. Xクラスでの学習活動・学習項目に対する学習者コメントの分析と考察

コース終了後に、Xクラスで行った各学習活動を学習者がどのように捉えていたかを聞くインタビュー調査を行った。まず、各学習活動に関する予め準備しておいた質問をしつつ、そこから発展させた詳細な質問を行う半構造化インタビュー調査を一人1時間～1時間半程度、個別に実施した。以下、インタビュー調査での学習者コメントから浮かび上がった点について、筆者らの授業観察による振り返りも加えて考察し、今後の実践に向けた改善点を検討する。なお、提示する学習者コメントは、筆者らが要約したものである。

まず、①目標設定の段階（学習活動1，2）では、過去の先輩のレポートや発表会DVDを見て、言語面・内容面・構成面から優れた点や改善点を分析して議論する活動を行った。これにより、学習者全員と教師の多角的な視点から分析し、引用・図表説明・表現等の方法を意識化して目標設定する契機となったことが学習者のコメントから分かった。これは、その後のレポート作成やピア・レスポンス等において、自身やクラスメートの改善点を分析する視点にも繋がったのではないかと考えられる。但し、この分析活動が書く作業にさほど有益ではなかったと述べる学習者もいた。今後は、初めに教師側で分析のポイントを明示してクラス内での意見交換を活発にさせる等、分析のさせ方の工夫が必要であろう。更に、得られた分析視点をレポート作成や口頭発表に繋げさせていく具体的方法についても、より綿密な検討をするべきだと思われる。また、読解力や聴解力の差があり、小レポートと発表会DVDの理解・分析の深さにも差が見られた。ピア・リーディングを取り入れる、語彙リストや教師による説明を増やす等の配慮も必要だと思われる。

学習活動1：先輩の小レポート集分析

- ・特に、レポートの弱いところ、悪いところを皆で指摘し合って学んだ。レポートには引用マーク、図やグラフの説明をきちんと書くということが学べた（学習者A）。
- ・書くのにあまり役立たないと思うが、先輩ができたので自分もできると勇気とやる気が出た（学習者B）。
- ・「1.はじめに」の書き方やまとめ方、表現の仕方等が参考になった（学習者E）。
- ・レポートの書き方が分かった。レポートを書いたのは一人の学生だが、クラスで7人の学生+1人の先生の頭を使って、いいレポートにするにはどうしたらいいか考えて議論できた（学習者F）。

学習活動2：先輩の発表会DVD分析

- ・役に立ったが、途中でビデオを止めたり、他のビデオに移ったり、いいところだけをハイライトで見せるようにしたので、悪いところも見せて分析したかった（学習者A）。
- ・どんな態度で発表するか等が分かったので、見ておいて良かった。春学期に先にDVDを学生に見せておいたら、自分のゴールが見え、この程度までできると励ますことができると思う（学習者E）。
- ・先輩のいい点と良くない点分かり、自分はこうしようと思えたので、良かった（学習者G）。

②構想の段階（学習活動3，4）では、大学図書館ツアーへの参加をきっかけに、研究テーマが絞れた、文献収集方法が分かった、レポートに入れる情報の下地になったというコメントが見られた。改めて、文献の探し方を習う機会提供の重要性が確認できた。但し、理科系の学習者は、文科系の大学図書館で十分に文献収集ができず、インターネットでの検索が多くなった。そのため、学習者の日本語での検索力に配慮し、教師側から文献収集に有効なURL（日本政府の白書、ふりがなサイト等）を紹介した。大学図書館と更なる協力を図り、留学生向けのサイトの紹介や、他大学の図書館利用方法、参考文献の書き方等が学べる図書館ガイダンスを入門～上級編へと段階的に数回ずつ行っていく必要も感じた。

また、調査計画書とアウトライン作成、及び、教師からのフィードバックを通して、内容を深め、レポートのタイトルを検討し、構成や定義・説明の重要性に気づく機会になったというコメントが見られた。但し、口頭報告は、そのための日本語表現を導入しておいたものの、適切な表現で要領良く説明できない、報告内容が十分に練れていない等が観察された。口頭報告のための下準備により注意を向けさせるべきだと思われる。

学習活動3：図書館ツアー

- ・図書館ツアーは、トピックを選ぶのにも役に立った。それまではWEBサイトだけ見ていたが本等も参考にできるようになった。借りてきた本の内容がレポート本論や図表作成の下地になった（学習者B）。
- ・図書館で調べたが見つからなかったの、その後は部屋でパソコンで調べた。（学習者C）。
- ・最初の授業で図書館で探す練習をして本を借りた後、自分で図書館に4回ぐらい行って、ネットで自分で探せるようになった（学習者D）。

学習活動4：調査計画書，アウトライン作成

- ・先生にもっと詳しい内容を書いた方がいいとフィードバックをもらい、内容が深められた(学習者D)。
- ・一番役に立った。先生の計画書の添削で、タイトルの書き方等、気づいたことが多かった(学習者E)。
- ・教師が書き込んでくれたアドバイス等を参考にした。当たり前の言葉だと思っていたことが、知らない人にも分かるように定義等を書いた方がいいことが分かった。(学習者F)。
- ・論文は、建物のように強い基礎を築いたら何が言いたいかわかるようになってしまった(学習者F)。

③レポート作成・口頭発表準備の段階(学習活動5, 6)では、レポートの構成や参考文献の引用方法、レジユメの書き方等の理解が増したというコメントが見られた。また、レジユメ作成によってレポートの構成を再点検できた様子も窺えた。そして、1年間の予備教育を終えるに当たり、レポートと口頭発表を完成させて達成感を味わい、4月からの大学進学への自信に繋がったということがコメントに現れている。こうした点は、1年コース全体による初級～上級段階への入念な学習の積み上げがあつてこそ可能となったものである。特に、初級～中級段階での文章表現指導(言語的側面・構成的側面・内容的側面を意識した説明文や意見文等)、及び、口頭表現指導(3部構成、テーマ絞り込み、社会的・文化的なテーマ設定、レジユメ作成、授業中のやり取り等)の積み上げによるところが大きい。これが1年コースの集大成である上級「総合日本語」の特長だとも言えよう。

今後は更に、実際に大学進学後、学習者達にどのようなレポート作成や口頭発表等の課題が求められ、どのような問題があるか等、追跡調査を行い、実践への示唆を得ることも必要だと思われる。また、今回のXクラスでは、レポートや発表資料を仕上げるのに時間を割き、音声面の練習が十分に行えなかった。オンラインのアクセント辞書(平野他2013)を有効活用する等、自律的に発音練習ができるようにする等の工夫が必要であろう。

学習活動5：レポート作成

- ・レポート作成は、書き方や引用の仕方、「1.はじめに」～「5.おわりに」の構成等が学べ、将来の大学での勉強の参考になるため、必要である(学習者A)。
- ・レポートを完成した結果を誇りに思った。(学習者A)。
- ・引用してレポートを書くのは初めてだったので、参考文献の入れ方が分かった(学習者C)。
- ・母語でもレポートを書いたことがなく不安だったが、大学生になってからもこれぐらいは書けると自信がついた(学習者C)。
- ・前は英語で考えてから書いていたが、今では日本語で考えられるようになった(学習者F)。

学習活動6：口頭発表の資料作成

- ・レジユメの指導で、名詞で終わること、簡単な日本語を使うこと、印の使い方等が学べた(学習者A)。
- ・レジユメで流れに沿った番号の付け方や、読みやすく簡単にまとめる方法が分かった(学習者D)。
- ・レジユメの指導をしてもらい、レポートでまだ書いていない足りない部分分が分った(学習者E)。

④やり取りの段階(学習活動7, 8, 9)では、教師やクラスメートとのやり取りを多く取り入れたことで、他の学習者のレポートを参考にしつつ言語面・構成面を検討し、自身の主張や考察の内容面を深めて、レポートを改善していったことがコメントから読み取れた。また、やり取りの中で、ピアの進捗状況を知り、自身の励みにしたというコメントもあった。一方、序論と結論で自身の意見を展開させることに困難を覚えていたと述べる学習者もあり、口頭報告の際、他の学習者から結論の構成について助言を得る様子も観察された。その他、教師の授業中の観察では、自身が得たフィードバックをピアへのフィードバックにも活かしている様子も見られた。更に、理科系の学習者同士で助言し合うほか、専門分野に詳しい教員や先輩にもレポートを見てもらうといった、人的リソースの活用を行い、教師だけではフィードバックの限界がある点を補えたコメントする学習者もいた。だが、レポート作成が遅れ、ピア・レスポンスが行えなかったことを悔いる学習者もいた。

今後は、教師やピアとのやり取りをより活発にし、多角的な視点からのフィードバックを得て、自身の主張を明確化させ、自己改善していけるような環境作りを試みる必要がある。

また、教師が2人いるため、それぞれ別の角度から見られる点を評価するコメントが見られた。他方、2人の教師のフィードバックが矛盾して見え、混乱したというコメントもあった。教師同士のフィードバックのすり合わせ方法とともに、学習者へのフィードバック方法を検討するべきだと思われた。それと同時に、様々な視点を持つ複数の教師やピア等からの多角的なフィードバックを学習者が自分なりに統合して、レポート作成に活かしていけるようになることも重要であろう。

学習活動7：進捗状況の口頭報告

- ・結論の口頭報告は、自分のオリジナリティ（意見、主張、提案）を入れることに気を付けた（学習者A）。
- ・序論と結論の口頭報告をしたが、自分の意見を述べなければならない部分なので、一番難しかった。本論の部分は、ネットからの引用が中心なので、やさしかった（学習者C）。
- ・役に立った。自分はこういうことを書くという骨組みをみんなに知らされた（学習者F）。

学習活動8：教師からのフィードバック

- ・教師は二人がいい。一人はメインで指導し、もう一人は原稿を読まずにレジュメやPPT等のフィードバックをしてくれたのが良かった（学習者A）。
- ・レポート作成の途中で教師と学生にフィードバックがもらえ、自分の悪い点が分かった（学習者A）。
- ・先生との付き合い方が分かった（学習者E）。
- ・直せば直すほど内容が分からなくなって迷った時もあり、大変だった。最後に1人の教師からもらった修正の後に、もう1人の教師から違うフィードバックをもらい、どうすればいいか戸惑った（学習者E）。

学習活動9：ピア・レスポンス

- ・自分と同じレベルの学生の意見が聞けた（学習者A）。
- ・先輩に来てもらえたら専門的な意見が聞けるので、もっと来てもらえたら良かった。（学習者A）。
- ・一番役立った。先生は日本語の先生なので、理系の友人に読んでもらうのが大切だと思った。分かりにくい表現を指摘してもらった（学習者B）。
- ・他の人がどういうふうに行っているか、レポートの構成・流れ等が分かり、参考になった（学習者B）。
- ・みんなが自分のレポートを読んでくれて、結論の部分に何が書きたいのか等、自分の気づかないことに意見を出してもらえた（学習者B）。
- ・一緒に書き始めたので、他の人の進むスピードや内容を知り、がんばろうと思った。書き方も習った。Aさんの「1. はじめに」を読むと研究動機に自分の経験を入れていたので、そうしてみた（学習者C）。
- ・クラスメートのレポートを読む時間がなかった。Aさんには自分のを読んでもらって表現や図のアドバイス等がもらえた。他の人がどう思うか、説明の順番等が分かるかもっと聞いてみたかった（学習者F）。

⑤最終発表の段階（学習活動10）では、1年間の予備教育の集大成としてレポートの成果報告を行う最終発表会を行い、学習者自身の成長を互いに確認し、1年間の学習プロセスを振り返るのに有効だったことが学習者コメントから確認できた。また、各口頭発表に対するピアや教師、先輩ゲスト等の様々な視点からのフィードバックが共有できたのが良かったとするコメントもあった。特に、日本語学習の苦勞を乗り越えた先輩ゲストの参加は、自身が目指すような将来の大学生像を描くのに良い刺激となったようである。これらを通して、学習者達が今後の口頭発表に向けた新たな目標設定を発展的に行う様子が観察できた。今後も、参加してもらえ先輩ゲストとのネットワーク作りや、発表プログラム等の事前準備の充実を図る必要があるだろう。そして、学習者、ゲスト先輩、教師がより建設的なフィードバックを与え合える、充実した最終発表会にする工夫が必要だと考える。

学習活動10：最終発表

- ・1年間一緒に学んだクラスメートと自分の日本語力や考え方等の成長が見られて、良かった（学習者E）。
- ・7人全員の発表について、先輩と先生のフィードバックをメールで送ってくれたので、みんなのが読めて良かった。自分の感想と先生や先輩の感想が違い、視点の違いが面白かった（学習者F）。
- ・先輩がゲストで聞きに来て、フィードバックをくれたのが良かった（学習者G）。

5. まとめ

以上、予備教育でのレポート作成と口頭発表を連携させた日本語クラスにおける学習活動と学習項目について、学習者がどのように捉えていたかをインタビュー調査を基に分析した。その結果、以下のような5点の改善点が明らかになった。

1点目は、レポート集・発表会DVDの分析活動の方法、及び、その後に行う学習活動との関連付けの方法を検討することである。2点目は、図書館との連携を充実させ、文献収集を各学習者が円滑に進められるように段階的に数回に分けて支援していく方途を考えることである。3点目は、教師・ピア・先輩・専門教員等とのやり取りによって多角的な視点を得て自己改善していけるような学習活動と環境作りの充実化である。そのためには、教員間の連携をより活性化し、人的リソース拡大のためのネットワークを構築することも必要になる。4点目は、口頭報告のための下準備（例：情報の収集・整理、日本語表現・発音の練習等）のさせ方の工夫である。5点目は、各学習者に合わせた学習活動の柔軟化である。特に、学習者の日本語力や作業速度、要望に配慮し、ピア・レスポンス参加の度合いを慎重に調整する必要がある。また、各学習者が遭遇する様々な困難点に対応すべく、教師から助言するほか、授業で個々の問題点を共有して助言し合える工夫も重要であろう。

こうした改善点を1つ1つ洗い出し、次なる実践に向け、常に学習活動と学習項目を更新・改善していく教師の柔軟な姿勢が求められる。そして、本実践のように非常に限られた授業時間内では、個々の学習者に応じて学習活動・学習項目を刈り込むこと、及び、全体の学習プロセスの中で学習活動を入念に1つ1つ積み重ねていくことが求められる。

また、筆者らは、実践研究フォーラムの参加者から学習活動や学習項目の詳細な説明を求める質問を受け、本稿で加筆説明すべき点が明確になった。その他の質問として、レポート集・発表会DVDの分析方法、指導方法（例：テーマ設定、調査計画、文献収集、内容深化）、口頭報告の内容・フィードバックの詳細、先輩ゲストの探し方、教材の具体例、評価方法、チームティーチングの方策等があった。これらの質疑応答から、他の現場と比較もでき、自身の実践を捉え直し、新たな実践・実践研究を目指す示唆を得た。その後、本稿をまとめるに当たって、筆者らのピアからも多くの貴重なコメントが得られた。

このような他者とのやり取りを通して、所属機関の教育実践や研究の成果を学び直せた。本実践はゼロ初級から上級までの積み上げが整備された予備教育の中で多くの知見を得ながら可能になったと痛感している。そして、筆者らは、予備教育における初級段階から上級修了時を見据えた教育をより意識するようになり、次年度の学習者に対して本実践研究からの示唆を活かしつつ日々の授業に臨んでいる。例えば、春学期初級のクラスガイダンスで、先輩の小レポート集と発表会DVDを見せて1年間の目標を具体的にイメージさせる試みを行った。また、クラスでの議論やピア・レスポンスを促進させるために、初級の文型練習でのやり取りや、作文に関する質疑応答等を可能な範囲で充実させている。

更に、本実践研究を行うことで、筆者らも学習者と同様のプロセス（テーマ設定、文献調査、データ収集・分析、原稿作成、発表、ピアからのフィードバック・修正）を追体験できた。そして、筆者ら各自のこれまでの経験知を言語化することで意識化できたことも教師としての学びに繋がった。また、実践直後のインタビュー調査により、学習プロセスの随所における学習者の思いを細かに知り得たことは教師として意義深い学びとなった。

今後の課題は、レポート作成のための分析力育成等、各学習者の学習プロセスの詳細な

分析である。なお、大学進学後の学習者達への追跡調査も新たな課題として行いつつある。

謝辞 本稿執筆に当たり、貴重なご助言をくださった皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 池田玲子 (2007) 「第4章 ピア・レスポンス」, 池田玲子・館岡洋子『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房, 71-109
- (2) 伊集院郁子 (2011) 「「JLC 日本語スタンダード」の教育への応用を目指した文章表現教材の作成」『世界的基準となる日本語スタンダードの構築 報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター, 175-180, 197-199
- (3) 大島弥生 (2009) 「語の選択支援の場としてのピア・レスポンスの可能性を探る」『日本語教育』140号, 3-25
- (4) 大津友美 (2012) 「小論文作成のプロセスにおける「記事レポート」の試み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38号, 105-114
- (5) 大津友美 (2013) 「小論文・レポート作成クラスにおける新聞記事の活用」『JLEM 20周年記念イベント分科会2 教育コンテンツ』配布資料
- (6) 工藤嘉名子 (2011) 「口頭表現指導における実践と JLC スタンダードー初級・中級レベルの評価法を中心にー」『世界的基準となる日本語スタンダードの構築 報告書』東京外国語大学留学生日本語教育センター, 180-185, 200-204
- (7) 工藤嘉名子・藤森弘子 (2009) 「初級1分スピーチの産出にみるモデル提示の作用」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』35号, 47-62
- (8) 坂本恵 (2007) 「「アカデミック・ジャパニーズ」での教育項目について考えるーJLC 日本語スタンダードの作成に向けてー」, 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』33号, 97-110
- (9) 東京外国語大学留学生日本語教育センターHP (2010) 「世界的基準となる日本語スタンダードの構築ー留学生のアカデミックな日本語力の飛躍的な向上を目指すー」
<<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/index.html>> (2013年6月2日)
- (10) 原田三千代 (2006) 「中級学習者の作文推敲過程に与えるピア・レスポンスの影響ー教師添削との比較ー」『日本語教育』131号, 3-12
- (11) 平野宏子・中川千恵子・中村則子・田川恭識・峯松信明・中村新芽 (2013) 「オンライン日本語アクセント辞書 OJAD の機能拡張と学習支援」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 20, 34-35
- (12) 宮崎七湖 (2012) 『人文系大学院留学生の文章課題遂行過程における管理プロセス』早稲田大学出版部
- (13) 村上康代 (2008) 「理工系日本人学部生のための少人数演習日本語教育における実践ー口頭発表に対する質問をレポートに活かすー」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』<<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2008murakami.pdf>> (2013年6月2日)
- (14) 横田淳子・伊集院郁子 (2009) 「「JLC スタンダード」に基づいた初級段階における文章表現指導の試み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』351号, 87-102